

アメリカ占領下における「プロテスタントキリスト者」の〈原爆意識〉

——長崎を視座として——

服部 康喜

一、前提的考察

この論の前提として、長崎市民の〈原爆意識〉を考えるにあたって、直接的な「原爆体験」と「米国」という「他者体験」の二つのベクトルを想定することが必要ではないかと思う。敢えてこのような指標を提示したのは、長崎市民の〈原爆意識〉と一言で言っても、共通した内実を持ち得ているのか、という事柄に対しては懐疑的にならざるを得ないからである。その場合、長崎においては歴史的に「米国」という「他者」のイメージが、〈原爆意識〉の形成に決定的に関わっていることを認めざるを得ない事情があったと考えられるからである。敢えて言えば、原爆投下という歴史的事実は、あれほどの惨禍をもたらしながら、必ずしも長崎市民の共通体験や共通意識を生み出しはしなかった。これが現実であり、何よりもその多様性を生み出したのは「米国」という「他者体験」の質と密度に大きく依存していたからではないだろうか。そして、この現実を考察するにあたって、ひとまず長崎の

「プロテスタントキリスト者」と「カトリックキリスト者」および「その他の長崎市民」という三つのカテゴリーを想定することが有効であると考えられる。ここでは「プロテスタントキリスト者」に焦点を絞って考察することになるが、取り敢えず「カトリックキリスト者」に関して言えば、その象徴的人格である永井隆の強い「反共思想」と宗教的な「受難（燔祭）思想」は「米国」に対する親近感を深めることはあっても、憎悪と反発からは遙かに遠いことを指摘するに留めよう。ひとまず、長崎の「プロテスタントキリスト者」のグループを「米国」という「他者体験」の密度と質から、ひと括りの社会的集団として考えてみよう。

太平洋戦争中、長崎のプロテスタント教会はそう広くない長崎の市街地に六教会を数えていた。この中には、英国国教会系の「聖三一教会」が含まれるが、その成立と維持にあたって支えてきたのは「米国聖公会外国伝道委員会」であって、その意味では長崎市内のプロテスタント教会のすべては「米国」のキリスト教諸教派の強力な支援のもとに存続していたことは明白な事実であった。加えて、長崎市内にはミッションスクールとして創設された「活水学院」（女学校・高等女学校・専門学校）と「鎮西学院」（中学校）があり、戦争末期においてすら、それぞれ一〇〇〇名と九〇〇名を越える生徒を有していた。もちろん、国策に従ってキリスト教的な色彩は両校共に脱色状態にあったが、それ以前の「米国」との濃い関係は歴史として個々の「プロテスタントキリスト者」の意識の中では歴然として生き続けたのだったし、たとえキリスト者でなくても、「米国」という「他者」の影は、長崎市の狭隘な土地と居住人口の密度から見れば、相対的に広範囲に

わたって浸透していたと言っている。そのことを歴史的な前提とした上で、戦後、具体的に「米国」という「他者」の影はどのように長崎という地に射していたのだろうか。以下は「長崎新聞」および「長崎日日新聞」の記事を追跡した報告である。

二、八・一五前後の長崎

歴史は後から振り返るならば、次に襲う事件の暗示が前もって示されていることに屢々気づくものだ。「長崎新聞」は戦争末期の日本の虚勢と重大事態の到来を鮮明に照らし出していた。以下、見出しは「…」で示すこととする。

「又も長崎へ・幼稚な敵伝単・一億に動かぬ必勝信念」…「時は迫れり」と題した謀略伝単を撒布…この伝単を拾った市民は敵の無知、低劣に呆れ返ると共にかうした奴らが物量のみを恃んで平和の美名のもと世界制覇の野望に狂奔することに敵愾心を燃やし、彼らが呼号する「時は迫れり」は却つて敵殲滅の「神機至る」のわれわれの決意と信念を確乎不動足らしめる。
(一九四五・八・三)

この五日後、「長崎新聞」が記すのは次の見出しである。

「広島市侵入のB29・新型爆弾を使用か・わが方に相当の被害・鬼畜の残虐性・敵機非道の暴爆募る」 (同八・八)

長崎市に原爆が投下されるのは、この記事が掲載された翌日、八月九日だが、翌一〇日の「長崎新聞」は次のように報じていた。

「長崎市に新型爆弾・被害は僅少の見込み」

おそらくこれが検閲の実態なのだが、なによりもその虚偽に長崎

市民は気づいていたはずである。日本政府が米国に対して正式に抗議を行うのは二日後のことである。

「残虐例を見ず・新型爆弾の害毒毒ガスを凌駕・帝国米に厳重抗議」…しかしていまや新奇にして従来の如何なる兵器、投射物にも比し得ざる無差別残虐性を有する本件爆弾を使用するは人類文化に対する新たな害悪なり、本国政府は茲に自らの名において、また全人類および文明の名において米政府を糾弾するとともに即刻かかる非人道的の兵器の使用を放棄すべきことを嚴重に要求する。
(八・一一)

ここに伺えるのは、米政府への抗議という形を取った、原爆に対する日本政府の衝撃の深さである。それは「殊勲、諫早の炊出部隊・長崎へ握飯の奔流・トラックで素早く配給」(八・一五)という見出しのもと、復旧に立ち上がる長崎の光景を描く一方で、次のような「号外」(西日本新聞)が同じ日に飛び交うという混乱を演じさせることになる。

「大東亜戦争終結の聖断降る・四国共同宣言を受諾・大詔煥発せらる・太平への大御心御宣示」

翌日、「長崎新聞」は次のような見出しの氾濫を見せることとなる。

玉音肺腑に徹す・総力国家再建に傾倒・「忍び難きを忍ぶ」御言葉畏し・異例の御前会議・阿南陸首自刃す「一死大罪を謝し奉る」・一億拝す大御心・畏き玉音に日本の涙・大慈大愛の御聖断・英霊も瞑せ国土再建・苦難忍び国体護持
(八・一六)

原爆投下から祖国再建へ、その見事な変身は現在から見ると異様

でさえある。しかしそれはある意味で、日本の内でのみ起こりえた観念的な変身の劇であり、いまだ「他者」の影が射さない一人の芝居に似ていた。

こうした一人芝居の役者は誰だろうか。それは天皇と臣下（赤子）に感情移入的に役割を交換し合う不世出な俳優に似ていた。その美しい仕草は「一億総懺悔」という姿態の中に直ちに生かされようとしていた。

「衣食住一切を奉置・真つ裸で出直さう」…今日において国民ごとくが努力の至らざりしことを陛下にお詫び申し上げ個人の生活に至るまで一切を陛下に奉置し、今後の生活上必要な最小限のものだけを御慈悲によつて頂くということにすべきではないか、全国民が真つ裸になつて同じ出発点にくのである。（八・二四）

この時期、紙面を飾るのは「敗戦責任」であり、それは全国民が分かち合ねばならない観念的な罪の総体であった。その観念的な後背地に「米国」という「他者」がその身体ともども登場するのは、もう少し後になる。

三、再建への始動と「米国」

まだ見ぬ「米国」という「他者」が姿を現すのは、進駐という形を取つてである。長崎市民にとって、それは未だ敗北という感傷を伴わない出来事だった。

「長崎・連合軍進駐を控えて・女性は隙をみせるな・当日は男性も屋内に」…服装は必ずモンペを着用しアツパツパや下

着のみで外出せぬこと、入浴行水等は遮蔽の上行ふこと、「ハロー」とか「ヘイ」とか又は片言の日本語で話しかけられても女子は相手にならぬこと。（九・一四）

同じ頃、原爆投下地浦上地区の様子を「長崎新聞」は次のように報じている。

「原子爆弾・一ヶ月後の現地・被爆者続々と死亡・絶えぬ街の火葬・神の試練に立つ聖教徒・記念物として天主堂を保存・聖教徒一万が犠牲」（九・一五）

これと平行して、長崎市の復旧に必要な経費は一億円と見られ、その前途はきわめて困難なものであることが報道されている（九・一六）。米軍が長崎に上陸するのはそれから間もなくである。

「長崎地区進駐開始・大型輸送船二十数隻に分乗・きのふ正午入港揚陸・無邪気に明るく・長崎に上陸第一歩」（九・二四）

おそらく、当時の長崎市民は上陸した米軍兵士を見て、安堵の気持ちを抱いたに違いないだろう。なぜなら、彼らは敗北という冷厳な事実を突き付ける恐怖感を与えなかつたからである。とりわけ、長崎の「プロテスタントキリスト者」にとつてはそうであった。むしろ彼らは、古い友人でさえあつたからだ。

「日米基督教の集ひ・平和と親善へ通ずるまごころ」…二十一日日曜日の午さがりミッションスクールとして古い伝統に香る活水高女のさゝやかな一字でキリスト教をめぐる敬虔な日米信者の初会合が催された。進駐軍側からは特に第二師団から指定されたエルブリッジ・W・バートレイ中尉をはじめ海軍牧師のクラーク・リチャード・クーパー師、ゼームス・

L・ストーパル師の三名、日本側からは武藤活水高女校長はじめ四人の牧師、それに篤信の信者等が対応し、話しは日本の基督教が戦争中に受けた影響、日本における基督教の将来、基督教を通じた日米の友好親善について等尽きぬ信仰の話題が恩讐を越え、民族の垣を打ち除いてお互いの胸と胸に交ふ暖かい信仰への誠をもって語り続けられた。

(一〇・三〇)

日本の「プロテスタントキリスト者」が、「戦責告白」を行うのは一〇年以上後のことである。「米国」という「他者」はこの時、再会した友人のごとく優しかったと言っている。

しかし実は、彼らは勝利者であり、審判者でもあって、別の顔付きを持つ「他者」でもあった。そのことは次の記事によっても明らかであり、「米国」という「他者」を除外した観念的な国家再建は幻想であることを知るほかはなかったのである。

「敗北の自覚を徹底・対等観や歪曲嚴禁・米の言論報道管理方針」…マックアーサー元帥は連合国が如何なる点においても日本と連合国を平等であると看なさないことを明確に理解するやう希望してゐる。日本は文明諸国家間に地位を占める権利を許されてゐない敗北せる敵である。諸君が国民に提供して来た歪曲されたニュースの調子は恰も最高司令官が日本政府と交渉してゐるやうな印象を与へてゐる。交渉といふものは存在しない。さうして国民が連合国との関係における日本政府の地位について誤った概念を持つことは許されるべきではない。

(九・一七)

「東京裁判」が開始されるのは翌年(一九四六)五月からであり、

無条件降伏をした敗戦国民としての自己認識が始まるまでには、かなりのタイムラグがあったと見ていい。「米国」は決定的に勝者であり、冷厳な統治者であった。しかし、そのような認識は果たして日本国民の共通認識になり得ていたのだろうか。飛躍を恐れずに言えば、おそらく太宰が書き記さざるを得なかった次のような台詞は、敗北が共通認識になり得ていない実相を雄弁に語っていたのだ。

負けた、負けたと言ふけれども、あたしは、さうぢやないと思ふわ。ほろんだのよ。滅亡しちやつたのよ。日本の国の隅から隅まで占領されて、あたしたちは、ひとり残らず捕虜なのに、それをまあ、恥かしいとも思はずに、田舎の人たちつたら、馬鹿だわねえ、いままでもほりの生活がいつまでも続くと思つてゐるのかしら、…

〔冬の花火〕

太宰の『冬の花火』が掲載されたのは一九四六年(昭二一)六月一日発行の雑誌「展望」においてである。敗戦の認識に関わる八・一五からのタイムラグは正確に測定する必要がある。

それでは「プロテスタントキリスト者」の場合はどうであったのだろうか。日本全般のレベルで見ると、ほぼ同じタイムラグが存在したことが指摘できるだろう。一九四〇年(昭一五)四月に成立した「宗教団体法」により、翌年には「日本基督教団」が結成、プロテスタントキリスト教を奉じる諸教派はここに結集され、国策の推進に積極的に奉仕することになる。しかし、八・一五以後において戦後始めて開かれた「第一三回教団戦時報国会常務理事会」(八・二八)は、戦時報国会を戦後対策委員会に、また東亜局を国外局に改称して出発した。それは古い革袋に新し

い名称を張り付けたものであって、各教会に対して「われわれの誠が足らず（報国ノ力）が乏しかったので、敗戦となったことを深く（反省懺悔シ）、天皇の詔勅にあらわれた（聖旨ヲ奉戴シ）国体護持ノ一念ニ徹シ」（皇国再建）に努めねばならない、とした／そして、国体護持のためにつくられた東久邇宮内閣の一億総懺悔の提唱に呼応し、（陛下に対する至忠尚ほ欠くる処あり、同胞に奉仕するに怠慢）であつたことを懺悔し、（靈的道德的一大覚醒を先づ我らの間に期し之が全土に波及せんことに努め）ることを訴えた」（『日本キリスト教団史資料集』第三巻・概観）。そこにはほぼ二〇年後（一九六六・一〇）に実現される「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」に見られる戦争責任に対する意識はきわめて希薄と言わざるを得ない実情が伺われるだろう。そればかりか、GHQはキリスト教活動を背後から支援し、米国流デモクラシーの扶植には日本におけるプロテスタントキリスト教の拡大は望ましい状況であるとの認識を持っていた。もちろん、そのことの必要条件として百年におよぶ日本伝道の歴史と実績が存在していたのだった。そして、冷戦構造が固定化していく中で、キリスト教はGHQのみならず、日本の支配層においても反共という一線でキリスト教の拡大は歓迎すべき事態と見られていた。ちなみに戦後最初の内閣である東久邇宮内閣において、戦前からのキリスト教界の指導者の一人である賀川豊彦が内閣参与に任用されたことは、当時のキリスト教がどのように評価されていたのかを雄弁に語っていよう。たとえば賀川は次のように語っていた。

「キリスト教に根を降せ・日本の民主化！・天皇廃止は暗殺

誘致」…日本の敗因は軍事的資源の不足よりも道德の頹廢にあつた、日本が負けると思ふ。今後は日本に真実のキリスト教が復興する事こそが望ましい。キリスト教義に根を降さない限り日本に民主主義はあり得ない。

（賀川豊彦氏・外人記者と語る）一九四六・二・五

賀川豊彦については、戦前と戦後の言動の落差など後年、彼に対する批判が起こるが、それでも一時期、世論は彼を首相候補の第一位に推していたことも事実であつたことを忘れてはならない。

こうして「米国」は日本の「プロテスタントキリスト者」に最大限の期待を持って支援に乗り出していった。次の記事は植村環女史（植村正久の長女）の長崎訪問を記したものであるが、日米交流の出発点は双方のキリスト者の交流から始まったことは記憶に留めておこう。

「植村女史長崎講演・小さな観念捨て、世界のために励もう」
「戦後」平和の使徒」として渡米した植村環女史は、米国Y W C A 幹事ミルドレッドリー、小野井ユキ両女史と、ともに二十三日午前十一時来崎。活水女専その他を訪問、午後七時から長崎民友新聞社主催の講演会に臨み「アメリカより帰って」と題して場内を埋めた聴衆を前に民主主義アメリカの実態を、あますところなく説き、約一時間半にわたって講演を行い、同夜は諏訪荘に一泊、二十三日午前八時六分長崎発列車で大分に向かった。／民主主義のうわべをまねるのではなく、民主主義の本質をしっかりと学びとらねばなりません。日本人は今日こそ自己のためという観念を捨て、世界人類のため奮闘

しなければならぬことを痛感しました。：

(五・二四)

日米の「プロテスタントキリスト者」の交流は、当然のことながら、生活の基盤を破壊され尽くした日本側からではなく、米国側からの招待という形で行われた。そして、日本に帰国した彼らの使命は、米国の社会および政治、思想、宗教、文化の紹介という方向をまず取らざるを得なかった。それが「米国」の友への感謝の徴であり、日米の和解を願う自然な心の姿だった。まさに日本の「プロテスタントキリスト者」は、鎖国制度を放棄して開国に大きく舵を取った日に帰還したかのように、「米国」を学習し直すことから始めたと言っている。そしてその営為を通じて、「米国」という古い友人を確認したのだった。このことは、実際大きな政治的な宣伝効果を持っていたと言える。その一方で、GHQは日本各地の小学校に教育担当官を派遣して、「米国」的民主主義制度の解説と学習活動を推し進めていた。こうして日米の和解のための素地は作られていったのである。

こうして作られた日米の和解ムードを象徴する出来事が、ヘレンケラー女史の来日であったと言える。彼女自身の来日目的は、日本の障害者に対する援護法制定に向けての環境を作るといふことにあつたが、それにしても「米国」はその良心を代表する最良の部分を送り出したのであつた。以下は「長崎日日新聞」に掲載された記事の一部である。

「青い鳥・ケラー女史来る・こぼれる慈愛の微笑・花束捧ぐる子に愛のキス・祈る長崎の復興」…この前私が訪ねてから十一年の月日が経ちました。この十一年の間に私が長崎の方

々から受けた友情は絶対に忘るゝものではありません。私がこゝに長崎に来た十一年前の日を思い出していることを知って下さい。私はしかし心に悲しみを一ぱい持っております。美しい海山に囲まれた長崎がかゝる姿になろうとは—全く胸が痛くなつて参ります。かく焼けかく破壊された街の中から貴方方の優しい心の現れとして贈られた花は私に感謝の言葉を思い出させます。だがこゝに美しい海が川が囲んでいるこの街を、そして日本の美しい姿が皆様方の手で必ず再建されることだと確信して居ります。

(一九四八・一〇・一七)

「貴方にあえて嬉しい」・永井博士を訪れたケラー女史」…予報も何もなくてこんな家に突然の来訪をうけて恐縮した。あの時私は本当に青い鳥が飛んで来たという感じだった。あいさつもそこそこに私に握手を求められた女史は「あなたのことはよく聞き知っておりました。はるか遠いアメリカから日本のはてまで来て原爆の地でこんな小さな家に寝ているあなたにあえて、私がかねがね思っていたことを言えるかと思つと誠によろこばしい」と述べられたのだった。私はこの言葉を聞いてただ感涙するのみだった。「私の体はすっかりだめになったが魂はまだまだ世界平和の為に働けるのです」と答えるとケラー女史は非常に喜ばれてお互い世の為になりましょうと何度も繰返していた。私の二人の子供の手まで固く握られて「神の恵はあなた達の上に豊かに注がれます」と慰めてくれた。

(同一〇・二〇)

後半の記事は永井隆の回想の一部だが、それにしても(原爆投下)

の当事国である「米国」から来たヘレンケラー女史の勇氣と愛情には感動させるものがある。それはまさしく「米国」という「他者」の良心的な一面であり、その最良の相貌を印象づけた瞬間だった。

四、「米国」の復興支援

復興に立ち上がった長崎を待ち受けていたのは、言うまでもなく資金不足であった。それは食料、生活物資、資材のすべてにわたって深刻の度を増し加えて行ったが、当然のことながら、それらの供給元は「米国」以外にはなく、また「米国」はその期待によく応えていたと言える。ここでは長崎のキリスト教界に絞って見てみよう。論の性格上、その中心は当然「プロテスタントキリスト教会」に関する事柄になるが、カトリック教会に関する事柄にも多少触れることになるだろう。まずは、教会再建への援助から始まる。その背景には、すでに触れたGHQのキリスト教支援の方針と共に、戦前戦中の価値観の崩壊がもたらした内面的な空白状態から多くの日本人がキリスト教会に集い始めたという新たな現象があった。キリスト教会は旧来の信徒のための礼拝の場の確保と共に、多くの来会者に対応すべく、早急な再建が求められていたのである。

「再建近い聖公会・ここにも米宣教師将校の協力」…英国国教直系の教会として日英同盟華やかな頃の思出を秘めて僅かに色あせた塔上の十字架が教会としての存在を誇示して来た長崎大村町の長崎聖公会は原子爆弾のため灰燼に帰した

が平和来るの鐘鳴り渡る宗教の解放とともに「今一度聖公会を」と信徒の間に復興の気運盛り上がってゐるのを知った占領軍付きの一牧師ストバーン師は再建の悲願に同情し同教会の再建に一役をと乗り出した。／はるばる海の彼方の友人知己に呼びかけ、長崎を去るに当たり同教会松岡牧師を訪ふと建築資金の一部にでもと五百円を寄贈した。このことを伝へ聞いた占領軍のブライヤー中尉は特に米本国の一主教に消失した長崎の教会復興の至難を懇へたところ、このほど「十分に援助する」との朗報到着、同教会の復興に明るい前途が見い出された。

（「長崎新聞」一九四六・一・四）

この時期、戦前の「宗教団体法」により成立した「日本基督教団」は、「聖公会」を含めてほぼすべてのプロテスタント諸教派を強制的に加盟の上、組織されたものだが、「宗教団体法」の廃止により教団から離脱する教派（聖公会、バプテスト、救世軍、ホーリネスなど）を除き、新たに「日本基督教団」を結成していた。一方、「北米」（米国およびカナダ）のプロテスタント教会使節団は一九四五年（昭二〇）一〇月に米軍用機で早くも来訪、翌年春の再来訪によって宣教師派遣、戦災教会復興、生活困窮教師への援助について具体的な検討に入っていた（内外協力委員会）。そうした援助の窓口になったのは新生なった「日本基督教団」であった。こうして教会を通じた本格的な支援活動が展開されることとなる。ちなみに、戦災教会（四八二教会）復興のために「北米」（米国およびカナダ）教会からの献金計画は一〇〇万ドル（邦貨で約一億五千万円）に上っている。それは当時としては、まさに莫大な金額と言えた。引用した長崎聖公会（「日本基督教団」）からは離

脱)の記事は、これとは別の教会復興援助であつて、おそらくそうした個別的な援助資金を加えるならば、「北米」が負担した金額は想像をはるかに越える規模であつた。

これとは別に、カトリック教会の動きを垣間見てみよう。カトリック教会がまず対応したのは、原爆によつて両親を亡くした戦災孤児の救済だつた。

「戦災孤児に春・米女宣教師が」マリア園「創立」…長崎を見舞つた原子爆弾の惨劇は寄辺なき戦災孤児の多数を生んだがこれ等の哀れな孤児を収容行末までの温かい面倒を見ようと加奈陀生まれの宣教師ソール・スタニスクス女史の手で「マリア園」が誕生。資格は三歳から六歳までの(可成女子を希望)戦災孤児であれば誰でもよく入所の手続きも簡単だ。

(「同」一九四五・一〇・二四)

続けて「聖母の騎士団」内に戦災孤児収容施設を開設。また、フランガン神父の進言によつてできた浮浪孤児収容施設「少年の町」は「長崎軍政部マクドネル中尉の肝入りによつて」リノリウム張りの床、ベッド、シャワー、サンルーム、水洗式トイレ、洋式食堂、図書室、医療室を完備したホテル並みの建物だつた(一九四七・一一・一)。こうしたカトリック教会の積極的な動きを受け、同時にGHQの支援のもと長崎県下では最大級の施設「向陽寮」が完成する。

「事業の成功を祈る・ニブロ教育官、マクドネル中尉が祝詞・きのう」向陽寮「の落成式」…恵みなき子等の温かき家県下孤児収容所「向陽寮」が出来上がり、三日盛大な落成式を挙行した。長崎市も郊外に近い岩屋山ろく岩屋郷の景勝の地

に総額二百六十八万円を投じた二百九十坪の木造セメント張りのショウシャな建物とその環境は恵みなき孤児の第二の故郷にふさわしく昨年来崎した「少年の町」フランガン神父の示すと、長崎軍政府マクドネル中尉の尽力を立派に生かし明日からのいとなみの期待を晴れの落成式におどらせていた。

(「長崎日日新聞」一九四八・一一・四)

この施設は収容定員五〇名で、図書室とシャワー室を備えた当時としては豪華なものであつた。これらの施設の建築に対して具体的にどの程度の支援がなされたのかは不明だが、少なくともカトリック教会の影響力の大きさは長崎市民にとっては目に見えるものであつた。さらに次のような式典が行われていたことを考えるならば、カトリック教会の力の大きさは、一層実感できるものであつたに違いない。忘れてならないのは、そこにも「米国」という「他者」の大きな影が射し込んでいたということだろう。

「信仰に結ぶ日米・浦上天主堂の礎石祝別式」…十三日夜米国カトリック四使節団バッファ教区(ニューヨーク州)ジョン・オハラ司教等を迎へて再建浦上天主堂の礎石祝別式はきのふ十四日善意の人々の集ひのうちに執行された。／しかもこの地で聖別された教会があなた達が原子爆弾の洗礼を受けて、今日のこの苦痛のなかにあることは皆さんのすべてを知りつくしてゐる善意に満ちた神様の思召です。／あなた方と米国二千万カトリック信徒とは同じ宗教を奉ずる謂はば兄弟なのであり、さうした意味で私共は今後ますます密接に協力して「カトリックの愛」を創造する様努力しなければならぬ。

(「長崎新聞」一九四六・七・一五)

おそらく、原爆によって最も被害を蒙ったのはカトリック信徒だったが、「米国」カトリック教会のこの呼びかけは、その膨大な犠牲と引き換えにもたらされた平和への感謝と「米国」カトリック信徒の復興支援への大きな期待を呼び覚ますものだったに違いない。そこには原爆投下国「米国」に対する憎悪は発見できないだろう。

再びこの論の本題である「プロテスタントキリスト者」の側に戻るが、彼らにおいても「米国」は力強い支援者として登場していた。次は「長崎日日新聞」に掲載された支援の一部である。

「米国の寄付も仰ぎ・YMCA会館・長崎市の文化センター建設」…長崎市民の文化的社会的センターとしてYMCA会館の建設は各方面から要望されていたが、大橋長崎市長、脇山長崎商工会議所会頭が発起人代表となり二十五日午後四時から精洋亭に各方面の代表者約三十名が参集し、特に長崎軍政部デルノア司令官代理マクドナルドさん、教育補佐官メンダールさんも臨席、会館建設後援会発会式を挙げた。その建築計画は第一次は仮会館として木造瓦葺約五百坪、第二次事業としては鉄筋コンクリート地階共五階建の本会館を完成することとし、第一次事業には参百五十万円の資金を要するが、うち百五十万円は長崎市内有志より寄付を待ち、貳百万円は米国同情者よりの募金に期待され、本館建築費は全部米国民間の同情に仰ごうというのである。(一九四七・六・二七)

「鎮西学院復興・アメリカの救いの手」…長崎城山町にあった鎮西学院が原爆のため破壊され悲惨な状況にあることを知った米国の一牧師さんがこれに同情して救援資金補助資料調

査のため去月二十六日はるばる諫早市で不自由な授業を行っている鎮西学院中学校を訪問、種々調査し本年中に二万ドル(邦貨にして三百七十五万円)の援助資金や運動具、学用品なども是非送りたいという嬉しい話― (二〇・三)

後者に関して言えば、爆心地から五百メートルの距離にあった鎮西学院中学校は壊滅。当時、学校の他に三菱製鋼・三菱電機の工場として使用されていた校舎には一八名の男女がいたが、その内一〇三名が死亡。最終的には教職員五名、生徒一〇二名(正確な数字は不明)、教職員の家族三〇名を失っていた。この結果、鎮西学院は諫早に移転、戦後に再出発を期していた。その困難な再建を知って立ち上がったのはサンフランシスコ、バーリングゲーム(人口二万)のメソジスト教会(信徒八百名)のジョン・ウィルキンス牧師であった。これが鎮西学院の復興の始まりである。この五日後の新聞には、薬品、タイプライター、ピアノ、ミシンが近く同校宛に送られて来ることが報じられている(二〇・八)。

あるいは「米国」キリスト教会から送られて来たララ物資。これは政府間援助であるガリオア・エロア援助(資金)とは別に、「米国」キリスト教信徒の献金・献品による援助物資であり、まさに彼らの厚い友情を示すものであった。同じく「長崎日日新聞」から一部抜き出してみよう。

「病人乳幼児にララから贈物・長崎YMCA宛に」…長崎YMCA社会部では未帰還者、戦死者、引揚者の援護事業を行っているが、今回ララよりミルクその他滋養物の配分があったが、右の内困窮者の病人、乳幼児などに配給することになった。(一九四七・一〇・九)

「女学生にララ物資配給」…ララ物資として洋服地五十梱が本県に配給された。長崎佐世保の女学生と女専生に配給される予定だが、この配給についてララ物資中央委員会のローズ女史が十八日来県打合せ、併せて県下の社会事業施設を視察する。(二〇・一一)

ララの駐日カトリック代表H・フェルセツカー師の発表によれば米国農村キリスト教徒(旧教)海外援助計画に対する総計三百三十二トンの大豆が近く日本に到着する。この大豆は戦災国救済物資を集めるため全米各地を巡回する"友情列車"に農民達が寄付したもので、到着次第孤児、結核患者、養老院、学生などに配られる。(一九四九・四・九)

この他、たとえば「アメリカ少年赤十字」から慰問品が届き、「五、六年生一人あて鉛筆、消しゴム、便せんの一組、四年生以下は三人に一個の割で慰問袋を、中味は石けん、歯磨き粉、歯ブラシ、その他の日用品」が配られている(一九四七・一〇・一一)。ここで取り上げた事例は一部にすぎないが、明らかに「米国」という「他者」は、威圧的な勝者としてのみ振る舞ったわけではなかった。彼は友情と愛情に厚い隣人でもあった。もちろんそこには、特に長崎に限って言えば、原爆投下国という後ろめたさは深かったであろう。また、そのことが長崎に対する濃やかな配慮を生んだことは否定できない。それにしても「米国」が見せた素顔の一面は、本心からのものであったという印象は強く残る。

次に引用するのは「長崎日日新聞」に掲載された記事であり、鎮西学院と並ぶミッションスクール活水学院の状況である。

「民主教育に最善つくす・キャリアー女史、七年振り"活水"

へ帰る」…開戦前アメリカへ引き揚げた元活水女専音楽科教授キャリアー女史は五日再び日本を訪れ一時神戸で思い出の"活水"への赴任を心待ちにしていたが、宿舍の準備も出来たので二十日午後五時二十分着列車で来崎、今は見るかげも無く変り果てゝはいるが七年振りの懐しい長崎駅頭に下り立ったキャリアー女史は嘗ての古い友達や活水女専音楽科の生徒達に取りかこまれながら"再び長崎にお帰りになったの御感想は如何ですか"の記者の質問に"大変幸福です。まるで自分の家に帰ったようです"と心から嬉しそう。"日本の民主主義教育はこれからどんな風に"との問いに"私は最善を尽くします。"とにこやかに答え、生徒代表の花束を受けて活水女専に向かった。(一九四七・一・二一)

ここに登場する「キャリアー女史」とは活水女子専門学校音楽科教授オリブ・カリー(Olive Curry)女史のことで、日米開戦が迫った中で一九四一年(昭和一六)九月まで活水に止まった最後の宣教師である。戦後いち早く活水に戻った彼女の愛情の深さは、真実以外の何物でもないだろう。こうした中、日米開戦によって帰国の道を断たれていた一人の教師が活水に復帰する。

「科学的知識を養いなさい・在米九年の鶴田女史懐しの活水へ」…活水女子専門学校教授鶴田千代子女史(三九)は九年にわたる在米生活を終え、このほど横浜着。二十二日夜長崎へ帰り、なつかしの学園に到着した。昭和十三年八月メソジスト教会の派遣でアメリカに留学、オハイオ・ウェスレーアン大学に家事学を専攻して十六年十月学位を得たが、太平洋戦争のため帰国が阻まれ、さらに三年ニューヨークシラキム

ス大学で教育学を修め卒業後から帰国前までフィラデルフィア郊外にあるストレイン・ファーム校の教師として裁縫を担当、同校家事課長でもあった。アメリカから終戦後帰朝した教育人は数少く鶴田女史をふたゝび迎えた活水はもとより、教育界では相当な期待がもたれている。(一一・二五)

彼女が勤めていた「ストレイン・ファーム校」とは「特殊学校で要注意少女の教育にあたり在校生は四百名／一年の半分を普通教育で過ごし、あと半年は農耕・家事を行いつつ教育」するというものだった。それにしても、開戦後「米国」政府は日本人移民を強制収容所に隔離し、徹底的に管理下においていたことを考えると、彼女が受けた金銭的支援(学費)並びに敵国人である日本人の彼女に学校の重要な地位を与えて生活を支えていたという事実は驚くべきことであるだろう。そこには差別と偏見を抜き出た人々(キリスト教徒)がいたということであり、「米国」という「他者」の多様性が伺える例と言える。実は彼女の渡米中、両親と兄弟は原爆で死亡しており、後の平和運動への関わり原点となるが、彼女の心に映る「米国」という「他者」は単純な像を結ぶものではなかったに違いない。しかし、彼女が語るのは「米国」で学んだ彼女の真実だった。

日本の女子学生に対し私はこう望みます。いまわが国はすべて乏しく教育を受けるに気の毒なほどですが、しかし科学的な知識を常に注意して養いなさい。そして健康な無駄のない家庭をつくる素地をつくるのです。日本の街も家中も汚い所が多い。科学的になった婦人によってこそそれは矯正されるでしょう。(同)

特に注意すべきは「米国」キリスト教会の献身的な働きである。鶴田女史を雇い入れた「ストレイン・ファーム校」はクエーカー(フレンド派)教徒の経営する学校と考えられるのだが、彼らこそ絶対平和主義者であって、敗戦国日本の支援にいち早く立ち上がったのも彼らであったことは知っておく必要がある。

ところで「米国」キリスト教会は戦後、資力のない日本人キリスト者を多く自国に招待して学問研究に専念させたことはよく知られているが、その中に活水関係者がいたことを次に取り上げよう。

「活水の先生 招かれて渡米」…アメリカ・ニューヨーク・メソジスト修道局では日米文化の交流を図るため招へいする日本人教授の選考を行ったが、その結果、長崎活水女専雨森幸子(四三)・岩崎ヤス(五〇)・両女史を候補者に決定した。両女史とも同校には二十年間勤務している熱心なクリスチャンで渡米後の費用一切は修道局で担当するという好条件。滞在期間は約一カ年。(一九四九・四・五)

この時、長崎から選ばれたということは、おそらくある特殊な意味を持っていた。しばらくして次のような記事が報じられることとなる。

「米紙のトップかざる・Victim Glad Atombomb Ended War・ナガサキから初の女性 岩崎女史」火の洗礼「体験記」…九月七日付米国アイオワ州都デ・モイン市のデ・モイン・トリビューン紙はトップ見出しで滞米中の長崎活水女専教授岩崎ヤス女史の原爆体験を語る―と岩崎女史の写真をかかげて報道し、さらに大橋市長が記した「長崎市民は原爆が日本国

民を平和の使徒たらしめたので、これを火の洗礼と呼んでいる」というメッセージの一部が掲載され、反響を呼んでいる。

七月十三日サンフランシスコ到着後の岩崎女史は前校長のホワイト氏に迎えられて八月初旬からロサンゼルス夏季学校を皮切りにカリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサス、ミズリーの各州で温い米国人の好情をうけ、各地で平和に立ち上る長崎市民の真情を伝える講演旅行をつづけて大きな反響を呼び起こしながら八月三十一日デ・モイン市に到着したもので九月八日は同市が全米にラジオ放送も行っている日。なお岩崎女史は現在シカゴ市ノースウエスト大学に在学し、日曜学校、教会や婦人会などで長崎について語り合っている。

(二〇・四)

岩崎女史の講演は、おそらく「米国」という「他者」にとつては最良のメッセージだったに違いない。彼女の「Victim Glad」というメッセージは、原爆投下国という負い目を払拭してくれた筈だからである。それと同時に、「米国」という「他者」はさらなる日本支援を心に誓う筈でもあるからである。心理的にこのメッセージは、「米国」という「他者」を、少なくとも長崎に関しては

原爆に関わる重圧から解放してくれただろう。一方、彼女は「米国」という「他者」におもねって、自己の真情を歪曲したわけではない。それは彼女の真情でもあって、ここに長崎と、否、少なくとも長崎の「プロテスタントキリスト者」と「米国」という「他者」が歩み寄れる一線があった。それは長崎の再建に協力を惜しまない「米国」と、歴史的に「米国」の影を背負い、最も身近な異国の「他者」として意識し続けて来た長崎「プロテスタントキリスト者」が共に演出した一線だった。

【参考文献】

「長崎新聞」および「長崎日日新聞」（昭和二二年以降「長崎新聞」は改称して「長崎日日新聞」となる）いずれも長崎県立図書館収蔵。

『活水学院百年史』（昭和五五・三）

『日本基督教団史資料』第三卷（一九九八・六 日本基督教団出版局）